

研究の概要

1 研究主題

「学習指導と評価に関する研究」（1年次）
～言語活動の充実を図った学習指導と新しい評価の実践事例の収集を通して～

2 主題設定の理由

（1）社会の要請と教育改革の動向から

21世紀、知識基盤社会、グローバル化など社会が急速に変化する中、次代を担う子どもたちは、幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて判断することや、歴史や伝統を継承しつつ異なる文化や歴史に立脚する人々を尊重し共存することなど、変化に対応する能力や資質がますます求められている。しかし、OECDのPISA調査、全国学力学習状況調査など国内外の各種学力調査結果によると、我が国の子どもたちの課題として、思考力・判断力・表現力等が十分に身に付いていないことがあげられている。

これらの状況を踏まえて、中央教育審議会が審議・答申が行われる一方、教育基本法、学校教育法が改正された。そして、新学習指導要領が小学校において平成23年度から、中学校においては来年度から完全実施される。新学習指導要領は、子どもたちの現状をふまえ、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」等の「生きる力」を育むという理念を踏襲したものである。とりわけ、「確かな学力」については、基礎的な知識や技能を習得させるとともに、知識技能を活用した思考力・判断力・表現力を育成し、学習に取り組む意欲を養うことを重視し、バランスのとれた学力の育成をめざしたものになっている。

学習指導要領の改訂にあたって充実すべき重要事項の第1として「言語活動の充実」があげられ、各教科を貫く改善の視点として示された。

本年度から実施される学習指導においては、子どもたちの思考力・判断力・表現力を育成すべく言語活動を充実させるとともに、それらが身に付いたかを見取る学習評価の充実が図られなければならない。

（2）田川郡の児童生徒を取り巻く状況から

平成23年5月、故山本作兵衛氏の描いた炭鉱労働絵画がユネスコの世界記憶遺産に登録されたことは、田川に明るいニュースとなった。しかし、エネルギー革命による炭鉱閉山の嵐から半世紀経とうとしているが、その影響は今でも児童生徒の生活に影響を与えている。

本郡の状況を見ると、経済的に厳しい状況にある家庭が依然として多いこと、不登校の増加や基本的な生活習慣が定着しにくいこと、肯定的な将来への展望が立ちにくいことなどの課題が挙げられる。また、本郡の学校教育においては、子どもたちの学力の向上と進路の保障が大きな課題とされている。一方、全国学力・学習状況調査の結果を見ると、徐々に改善は見られるものの全国平均よりも低く、特に思考力・判断力・表現力を問うB問題はポイント差は大きい。

したがって、子どもたちの学力向上と進路保障を実現するためには、基礎・基本

となる知識技能を確実に定着させるとともに、知識技能を活用する思考力・判断力・表現力を高める教育実践研究が望まれる。

(3) これまでの研究の経過から

当研究所では、平成10年度から平成14年度まで、「生きる力」の育成に向けて研究を積み重ねてきた。これらの研究は、授業づくりや評価活動、子どもたちの学力の向上、田川郡の教育のあり方の改善に一定の成果をあげた。

これらの研究を基礎に、平成15年度から平成17年度までの3年間、学力実態及び学力向上に関する調査・研究に取り組んできた。調査の結果では、郡内全体の平均点は依然として小中学校とも全国平均を下回っているという実態であった。

学力実態と学力向上の実態調査・研究を受け、平成18年度から22年度まで「学力向上の取り組みに関する研究」という主題に基づいて、一人一人の子どもに「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を身につけるためにバランスのとれた教育を実施することにより、真に「生きる力」を育成する実践研究に取り組んできた。実施のあり方として、小中学校校長会主催による教科等部会と連携し、各教科・領域部会において学力分析を行い、子どもの実態把握の上に実践研究を進めてきた。

年 度	研 究 主 題
平成10～11年度	「生きる力」をはぐくむ授業づくり
平成12～13年度	「生きる力」を育てる総合的な学習
平成14年度	「生きる力」を育てる教育課程の展開 ～評価活動の充実をとおして～
平成15～17年度	学力実態及び学力向上の取組に関する調査・研究 ～学力検査結果の分析と実践事例の収集をとおして～
平成18～22年度	学力向上の取り組みに関する研究 ～生きる力を身につけた児童生徒の育成～

3 主題の意味

(1) 学習指導とは

学習指導は、学習者の学習を援助し促進する教師の営みであり、学習者の理解を低次のものから高次のものへ変化発展させる目的意識的な活動である。今回の学習指導要領の改訂により、子どもたちの思考力、判断力、表現力等を育む観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動をするとともに、その際言語活動を充実させてそれらの能力を育成することが重視されている。ここで言う学習指導とは、言語活動を通し知識・理解を活用して思考力、判断力、表現力を高める活動を言う。

(2) 評価とは

評価は、子どもの学習状況を知り、学習目標の設定や指導方法の工夫などの改善に役立てるためのデータを得的活動である。今回の学習指導要領の改訂により、評価の観点の変更され、「技能・表現」が「技能」となり、「思考・判断」が「思考・判断・表現」となった。これは、言語活動を通し知識・理解を活用して思考力、判断力、表現力を高める学習指導が重視された結果に他ならない。新しく設定された観点である「技能」は、教科内容としての表現力をこれまで通り評価することに

なる。一方、「思考・判断・表現」で示された表現は、これまでの「技能・表現」で示されていた表現とは異なり、「思考・判断」したことの過程や内容がわかるように言語で表現するものである。そのため、学習指導において言語活動が重視されているわけである。これからの評価は、思考力、判断力、表現力を評価することが重視されることとなり、ここで言う評価も思考力、判断力、表現力が身に付いたかを見取る活動を第一義とする。

(3) 学習指導と評価に関する研究とは

新学習指導要領完全実施の本年度（中学校においては来年度）という過渡期において、各学校、各教科等部会においても新しい学習指導要領にしたがった学習指導に取り組んでいることと考える。本年度については、知識・理解を活用して思考力、判断力、表現力を高めるため言語活動の充実を図った学習指導及び、思考力、判断力、表現力が身に付いたかを見取る新しい評価の各教科等部会の実践事例の収集をすることにより、田川郡教育の充実・進展に寄与する研究とする。ただし、小学校の領域等及び完全実施の前年度にあたる中学校においては、前項「(1) 学習指導とは」「(2) 評価とは」で定義したものに準ずる実践とする。

4 研究の目標

各教科・道徳・外国語活動・総合的な学習の時間・特別活動において、新学習指導要領がめざす確かな学力を身につけるための学習指導と評価方法について究明する。

5 研究の内容

- (1) 各教科・領域等の学力や児童生徒の実態を分析する。
- (2) 各教科・領域等における主題を設定する。
- (3) 各教科・領域等における主題を達成すべき学習指導と評価方法を明らかにする。
- (4) 各教科・領域等において主題に基づいた研究実践を行う。
- (5) 各教科・領域等において実践事例としてまとめ、成果と課題を明らかにする。

6 研究仮説

各教科、領域等において下記のような手立てをとり、言語活動の充実を図った学習指導と新しい評価を位置付けた実践研究を進めていけば、児童生徒は新学習指導要領がめざす確かな学力を身につけることができるであろう。

- (1) 田川郡教育研究所と郡小・中学校校長会が連携し、各教科等部会を組織し、教職員が希望する教科等の理論や指導技術を磨く場を設定する。
- (2) 各教科等部会において、当該教科等における学力や児童生徒の実態や課題を明確にし、以下のように学習指導を工夫し、評価を位置づける。
 - ①指導方法（思考・判断・表現の具体化に基づいた言語活動の位置付け）
 - ②評価の位置づけ（評価基準の設定、評価方法の工夫）

7 研究の方法

(1) 研究の組織

①研修員の研修会

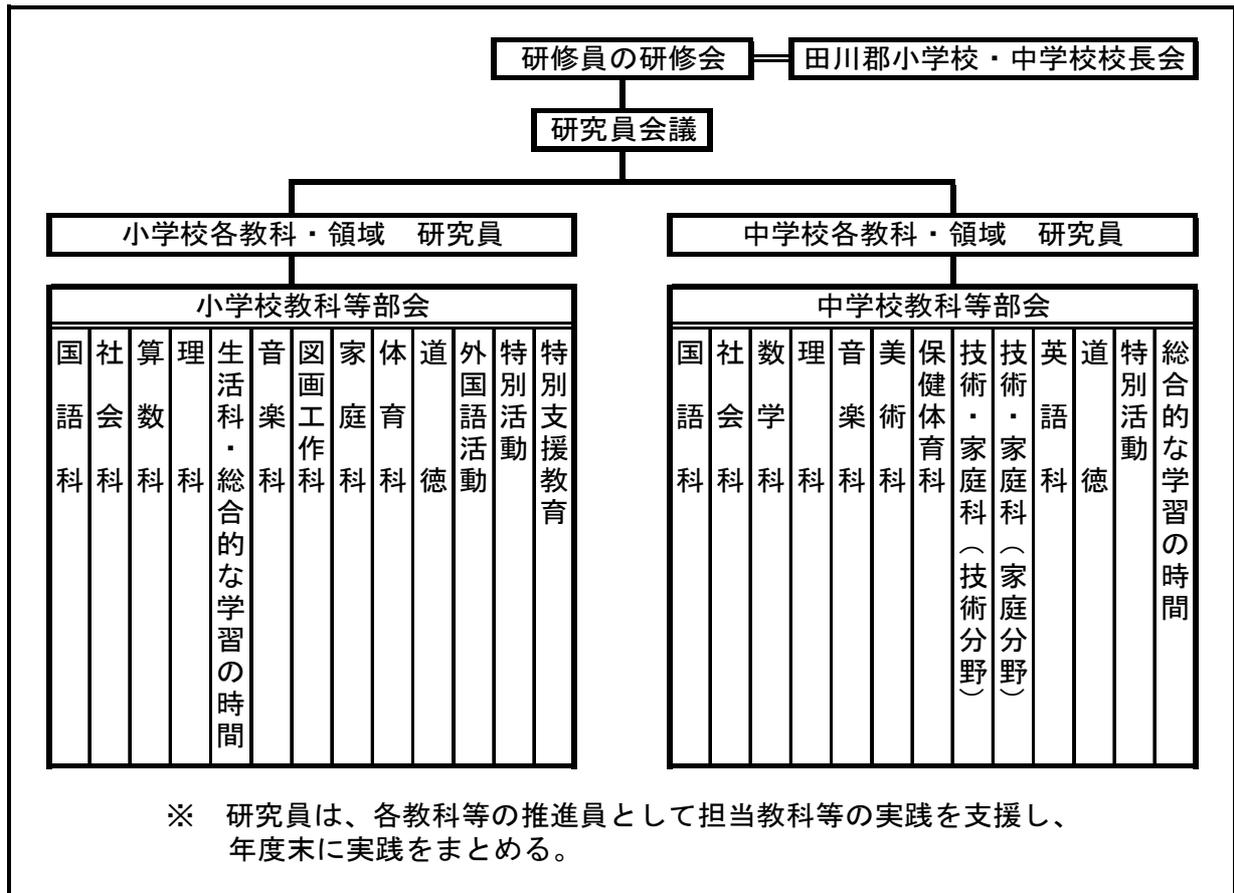
ア [構成] 所長 1 名、副所長 1 名、主任研修員 2 名（小・中学校教頭より各 1 名）
研修員 4 名（小・中学校教諭より各 2 名）、幹事 1 名、書記 1 名

イ [役割] 研究主題や研究構想の設定、研究の年次計画の立案等、研究推進の中核となる。主題にかかわる理論研究、実態調査等をもとに研究の見通しを設定し、授業設計の方向を示す。研究員との連携を図り、実証の援助を行う。

②研究員研修会

ア [構成] 研究所職員と研究員（小・中学校各教科等代表）からなる

イ [役割] 研究実践の中核となる。教科等の理論研究、実態調査をもとに研究仮説を設定、授業をとおしてデータの収集、分析を行い、研究主題の解明にあたる。



(2) 研究の計画

【1年次】

- ①研究主題の設定
- ②主題に基づく理論研究
- ③実践研究（各教科・道徳・外国語活動・総合的な学習の時間・特別活動）
 - ア 授業計画
 - イ 検証授業
 - ウ 考察・まとめ
- ④研究のまとめ
- ⑤研究紀要の作成